腸窒扶私菌ニ因スル皮下膿瘍ノ一例ニ就テ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 欣一郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38370

Nr. 1. Einfluss angestrengter Muskelarbeit

	Mittelkap.	Vitalkapazität	Residualluft	Puls
Vor der Arbeit	3,8	5.2	1.1	80
Unmittelbar nach der Arbeit	4,2	4.9	1.6	164
10 Minuten später	3.6	5.2	1.1	104

事實過勞ノ後ニハ往々一過性ノ肺氣腫ヲ認ムル者トス。而シテ殘氣ノ遺殘ハ肺胞ノ擴大ヲ起シ增量ノ減少ハ胸廓ヲ一度ニ擴大セシムル神經作用ニヨル者ナラン、氏ハ其結論トシテ

„als die zweckmässigen, kompensatorische Reflex aufzulassen"

トセリ、故ニ氏ノ發生說ハ反射神經說ニシテ胸廓ヲ高度ニ緊張シ肺氣腫ヲ起ス者トセザルベカラズ、其胸廓ノ緊張ハ血行心力呼吸代謝ニ及ボスコト已ニ論ゼル如シ

斯クボール氏ノ說ハ吸氣呼氣說竝ニ榮養諸說ノ以外ニ立ル神經說ニシテ予ノ標本モ之ニ依テ說明スルヲ得ル者ナリ更ニ玆ニ Freund 氏說ナルモノアリ肋骨ニ化骨ヲ起シテ鐘狀ニ胸廓ヲ擴大セシムルトスレド多クノ學者ハ其變化氣腫發生後ノ續發的變化ナルト信ズルモノ多シ

百尺竿頭、注意スベキコトハ肺氣腫トハ如何ナル者ナルヤ、各學者ハ種々ノ想像說ヲ上ゲルモ、レンチック氏以來吾人ノ取レル說明ハ

肺胞間隔壁ノ消失ヲ伴フ肺胞ノ過大膨脹竝ニ確固ノ肺擴張ヲ作ラル、病的狀態ナリ

ト云フニアリ、然シ、吾人ノ今日ノ研究ヲ以テ見レバ寧ロ病的狀態ト云フヨリ一症狀トスルヲ適當ナルガ如シ(?)

殊ニコーン氏ノボール說ガ益々確定セラレ得ルニ至レバ肺氣腫ナルモノハ肺胞ノ擴大セル者ニシテ從來ノ隔壁ノ缺損ハ正シク其「ボール」ノ擴大セル者トザセルベカラズ、殊ニ本標本ハコレヲ以テ易ク說明セラレ得ルナリ

唯々玆ニ一考ヲ煩ハシ度キハ往々肺氣腫ハ氣管枝炎(殊ニ乾性)ニ由來スル者ナレバ、之ヨリ進ンデ隔壁ニ炎症ヲ波及スルハ事實ニ於テアリ得ベキコトニ屬ス、而シテ彼ノ彈力纖維ノ增加減少等ハ之ニヨリテ起ル副事ニ外ナラザルガ如シ、換言スレバ肺炎ノ結果ニ外ナラザル者トモ說明スルヲ得ベシ、故ニ彈力纖維ハ氣腫ニ關係ナシ

本論ノ氣腫ナルモノハ老人性竝ニ間質性ノ肺氣腫ヲ除ケルモノト知ルベシ

●腸窒扶私菌ニ因スル皮下膿瘍ノ一例ニ就テ

特別會員(櫻木病院醫員) 中村欣一郎

腸窒扶私症ノ全經過中ニ於テ、窒扶私菌ガ所々ニ轉位シテ、病竈ヲ形成シ、或ハ諸種ノ症狀ヲ發スルコトハ、既ニ衆人ノ知ル所ナリ。即彼ノ脾臟轉位ニ於ケル脾腫、皮膚轉位ニ於ケル薔薇疹、腎臟轉位ニ依ツテ發スル窒扶私菌尿等ハ頻々吾人ノ相遇スル處ニシテ殆ンド腸窒扶私症ニ於ケル、固有症狀トシテ、記載セラルヽモノナリトス。而シテ彼ノ耳下腺、骨系統、又ハ關節、筋肉等ニ於ケル轉位ニ至ツテハ、前者ニ比シ遙ニ其數少ナシト雖モ、其報告決シテ僅少ナリトセズ。

余ハ昨年十一月、本市櫻木病院ニ於ケル、腸窒扶私患者ニ於テ、遇然、窒扶私菌ニ因スル、皮下膿瘍ノ一例ヲ實驗シタルガ、其膿瘍形成ノ機点ト思フ可キ事實ガ、甚趣味アルヲ以テ此處ニ報告シ、併テ將來臨床諸家ノ注意ヲ促サント欲ス。

○患者二十八年ノ男子　越野某、農業、

既往症略ス、入院當時ハ窒扶斯第三週ノ初期ト診斷、入院當時ニ於ケル、細菌學的試驗ノ成績如下、

I　患者血清ノ凝集反應。

凝集反應材料トシテ使用シタル菌ハ、業室在來ノ者ニシテ、傳染病研究所製造ノ、腸窒扶私馬免疫血清ノ一萬倍稀釋ノ者ニ於テ被凝スル菌種ナリ。

50,(+)100,(+)200,(+)400,(—)600,(—)800(—)1000(—) K(—)

II 患者血液菌ノ性狀

生物學的性狀ノ稍特異ナル点ハ、ラクムス葡萄糖加ヌトローゼ培地ニ血溫培養ヲ試ムルニ、廿四時間後ニ於テハ酸ノ形成ヲ認ムル能ハズ、培養三日以後ニ於テ始メテ培地ヲ紅變シ得ルモ、ヌトローゼヲ凝固セシムル能ハザル点ニシテ其他ハ全然相一致ス

凝集反應試驗ニ於テハ前記研究所製造ノ腸窒扶斯血清ニ對シ一萬培稀釋ニ於テ著明ニ凝集ス。

血清証明菌ノ細菌學的驗索ハ當時故在リテ單ニ上述ノ試驗ニ止メ、糞便試驗亦行ハザリキ。

然ルニ患者ハ入院直後ニ於テ、一回大量ノ腸出血ヲ來シ爾來七時間ノ間ニ八回ノ小出血有リ爲メニ前後二回ニ渡リテ約八〇〇ccノ食鹽水ヲ両側大腿内面ノ中央部ニ注入セリ。無論注入シタル生理的食鹽水ハアラカジメ攝氏百度ノ溫ニ於テ一時三十分宛二回ノ間歇滅菌ヲ行ヒシ者ヲ使用シ注射局部ハ始メ石鹼水ヲ以テ能ク洗淨シ次テ昇汞水ヲ以テ十分ニ洗セ酒精ヲ以テ强ク拭擦シ依的兒ヲ十分ニ散布シ滅菌綿紗ヲ以テ被包シ其間ニ介者併ニ術者ノ手指ヲ反覆消毒、滅菌シ然ル後注射シタルモノナリトス即十全ニ近キ消毒殺菌法ヲ講ジタルモノナルコトハ余自ラ斷言シテ憚カラズ。

患者ハ入院後十八日間ノ有熱期ヲ以テ全ク下熱シ下熱後第四日目ニ至リ卒然右側大腿部ノ疼痛ヲ訴ヘタリ。

當時驗スルニ先ニ食鹽水ヲ注入シタル時ノ刺痕ハ全ク小瘢痕ヲ以テ治癒セルニ關セズ刺痕ノ上部約三センチメートルノ部位ヲ基点トシテ周圍輕度ノ腫起ヲ呈シ壓スルニ稍軟、波動ヲ呈シ、且過敏ナリ、即趣味有ル化膿トシテ局部ヲ嚴重ニ消毒シ切開ニ先ンジ滅菌ブラッツ氏注射器ヲ以テ穿刺シ帶淡綠黃色ノ甚稀薄ナル膿汁ヲ得直ニ普通寒天斜面培養基六本ニ培養ヲ試ミタリ、

然ルニ血溫培養約二十時後ニ於ケル全斜面ノ發生コロニーハ總テ純培養ヲ呈シ甚非薄濕潤性ニシテ僅ニ透光性ヲ帶ビ一見葡萄狀菌、又ハ連鎖狀菌等ノコロニート其趣ヲ異ニス即反覆精査シタル成績ハ如次、

1 形態、運動。 短桿狀菌ニシテ運動活潑ナラズ。

2 標準チブス血清ノ凝否。 短時ニシテ凝集ス。

此處ニ所謂標準チブス血清トハ研究所ノチブス血清ヲ一〇〇培稀釋ニシタル者ニシテ疑問菌フイッセンノ目的ヲ以テ作リタル標準ノ血清ナリ。

3 ブリオン培養併ニインドール反應。 發育明ナルモ菌膜及インドールヲ形成セズ、インドール試驗ハ亞硝酸加里及硫酸ヲ以テ試驗シタリ。

4 葡萄糖加寒天。 發育スルモ凝固セズ。

5 牛乳培養。 發育スルモ凝固セズ。

6. ラクムス葡萄加ヌトローゼ培地（バルシコー培地） 血溫培養一週ヲ試ムル及乳糖加ヌトローゼ培地

モ酸ノ產生併ニ凝固ヲ認メズ（發育良）

7 ノイトラルロート寒天。 發育、還元セズ。

8 窒扶私馬免疫血清ニ對スル凝集反應。

一〇〇、(+) 五〇〇、(+) 一〇〇〇、(+) 二〇〇〇(+)

四〇〇、(+) 六〇〇、(+) 八〇〇〇、(+) 一〇〇〇〇(+) (K) (—)

9 患者血清ニ對スル凝集反應。

100,(+)200,(+)400,(+)600,(+)800,(+)1000,(+)5000,(+)

10000(+) K (—)

患者血清ハ下熱後十七日目ニ採集シタル者ヲ使用ス。

對照トシテ先ニ血液ヨリ証明シタル菌ヲ念ノ爲メ患者ノ血清（下熱後採集ノ者）ニ作用セシメタルニ最高一萬倍ニ於テ尙著明ノ反應ヲ呈スルヲ認メタリ。

即上記化膿竈証明ノ菌ハバルシコー氏培地ニ於テ葡萄糖ヲ分解セザル点ヲ除クノ他諸性狀殆ンド窒扶私菌ニ一致スルヲ以テ更ニ進ンデ其毒力ヲ驗シパイフエル試驗ヲ行ヒタリ而シテ其毒力試驗上先ニ血液ヨリ証明シタル菌ノ毒力ヲ知ルノ必要ヲ生ジ分離後既ニ約四十日餘ヲ經過セルニ關セズ是ヲ行フコトヽセリ。

動物試驗。毒力試驗ニハマウス及モルモットヲ使用シパイフエル試驗ニモルモットヲ使用セリ而シテ其成績ハ次ノ如シ

A、化膿竈菌ノマウスニ對スル毒力(分離後十三日目ノ試驗)

体重、	一六、〇	マウス	1/10	白金耳、 一四時後死、
体重、	一五、〇	マウス	1/25	白金耳、 一五時後死、
体重、	一四、〇	マウス	1/50	白金耳、 一三時後死、
体重、	一四、〇	マウス	1/100	白金耳、 生 存

B、對照血液菌ノマウスニ對スル毒力(分離後約四十日目ノ試驗)

体重、	一四、〇	マウス	1/10	白金耳、 九時後死、
体重、	一三、〇	マウス	1/25	白金耳、 九時後死、
体重、	一二、〇	マムス	1/50	白金耳、 生 存、
体重、	一二、〇	マウス	1/000	白金耳、 生 存、

C、化膿竈菌ノモルモットニ對スル毒力

体重、	四一〇、〇	モルモット	1/2	白金耳、 一八時後死、
体重、	三六〇、〇	モルモット	1/4	白金耳、 四日以內死、
体重、	三五〇、〇	モルモット	1/10	白金耳、 生 存、

而シテパイフエル氏試驗ノ成績ハ如次

体重、	二七〇、〇	モルモット	(對照試驗)
体重、	二八〇、〇	モルモット	(本試驗)

本試驗動物ニ於テハモルモットニ對スル最小致死量ノ四培ヲ轉染病研究所ノ賜窒扶斯血清〇、〇一グラムト共ニ適宜ノ滅菌食鹽水ニ混ジテ其腹腔內ニ注射シ對照試驗動物ニハ單ニ同量ノ菌ノミヲ注射セリ、而シテ本試驗動物ノ腹腔液ヲ荏爾毛細管ヲ以テ吸引シ驗シタル成績ハ明ラカニ溶菌現象ヲ認ムルコトヲ得タリ、

	二十分間	菌 (十)	三十分間	菌 (十)
一時間	菌減少不同球狀ヲナス。		一時間卅分	菌其減少不同球狀

而シテ對照試驗ニ供シタルモルモットハ注射後十二時間以內ニ死シタリト雖ドモ本試驗ニ供シタルモルモットハ死ヲ免レテ今尙健存ス、

即以上諸種ノ試驗ニ依ツテ化膿竈証明菌ト純粹ノ窒扶斯菌ナルコトハ疑ノ餘地無シ而シテ上述ノ如ク窒扶斯菌ノミニ因スル膿瘍ノキキハ敢テ珍トスルニ足ラズト雖ドモ本例ノ如キハ全ク食鹽水注射ガ其誘因ヲナシタル者ト認メテ差ツカヘ無カラン、何トナレバ組織間ニ注入セラレタル食鹽水ノ組織ニ及ボス器械的壓迫作用、即是ニ依ツテ被ル組織ノ抗低力減弱ハ少クモ血管外ニ排出シタル窒扶斯菌ノ發育ヲ容易ナラシメタル者ナラン、然リ而シテ食鹽水注入當時ノ患者ノ血中ニハ窒扶斯菌ヲ証明シタル事既述ノ如ク此事實ヨリ相傳セバ食鹽水注入時ニ於ケル小血管ノ破碎出血中亦窒扶斯菌ノ存在セシヲ疑フニ難カラザルナリ。

而シテ本例ノ實驗ニ依ツテ次ノ事項ヲ相傳シ注意ス

一、賜窒扶私患者ニ發スル膿瘍ハ例ヘ如何ナル細小ナル者ト雖ドモ、決シテ輕々視スル能ハズ是防疫上重要ノ事實ナリ。

由來總テノ膿瘍ハ衆人ノ深ク注意ヲ要セザル点アリ是一ハ膿瘍ノ多數ハ葡萄狀菌等ニ因スル者多キガ爲メニシテ其害毒亦急性傳染病ノ如キ慘憺タル者ナキヲ以テナリ豈寒心セザル可ケンヤ

二、賜窒扶斯菌ハ葡萄糖ヲ分解シ酸ヲ形成スル者ナリト雖ドモ余ガ茲ニ分離シタル菌種ハ血溫培養ニ於テスラ分解遲々タルシテ容易ニ酸ヲ形成セス其理由奈邊ニ存スルカ今日尙不明ナリト雖ドモ窒扶私菌ニシテ如斯菌種ノ有ル事ハ茲ニ一言シ置クノ要有リ

終ニ臨ミ恩師上田教授、併ニ福岡尊兄ノ指導ヲ謝ス

●澎湖島衛生一班ニ就テ

陸軍二等藥劑官　金堂圓

澎湖島ハ帝國ノ南門臺灣ノ鎖鑰ナリト云フ然レ𪜈世人多ク澎湖ヲ知ラズ或ハ其地ハ珊瑚礁ヨリ成ルト信ズルモノアリ或ハ翠綠滴ラントスル樂園ト想像スルモノアリ或天産物ニ富ミタル沃土ト信スルモノアリ或ハ瘴厲ノ氣ニ充チタル不健康地ト思フモノモアリ是澎湖交通不便ナル南海ノ一隅ニ僻在スルヲ以テ世人ニ紹介セラルヽ機會ナキト未ダ經濟上ニ於テ世人ノ注目ヲ受クルニ足ル價値アル要素ヲ發見セラレザルトニ因ル可シト雖畢竟澎湖ニ關シタル記錄ノ多ク世人ニ知ラレザルハ其一大原因ナリトス是ニ於テ余ハ聊カ該島ノ一部衛生狀態ニ就キ調査シ得タル實況ノ大要ヲ記報シテ世人ノ參考ニ供セントス

一、位置　澎湖島ハ東洋ノ咽喉日本ノ南門ニシテ清國福建艦隊根據地タル福州灣ニ對シテ一衣帶水ヲ隔ツルノミ英國東洋根據地タル香港及米國東洋唯一ノ軍港タル馬尼剌スビツク灣ニ到タルニハ一日航程餘ニ過ギス佛國東洋艦隊根據地タル柴棍又遠カラズ實ニ是等諸点ニ對シ日本帝國第一關門ヲ形成シ又臺灣ノ鎖鑰ニシテ古ヨリ澎湖ヲ有スルモノ必ズ臺灣ヲ有スルハ歷史ノ証明スル所トス然ルニ該島ハ日本九州ニ起リタル霧島火山脈ハ蜿蜒トシテ南西ニ至リ火山脈特有ノ弓形ヲ畫キツヽ海波ノ中ニ起伏シ沖繩列島ヲ經由シ走ルコト數百里臺灣ノ西方ニ於テ海面ニ躍出シ此ニ大小數十ノ島嶼ヲ成形ス之ヲ澎湖列島ト稱ス南ハ北緯二十三度九分四十秒ヨリ北ハ北緯二十三度四十五分四十一秒ニ至リ東ハ東經百十九度四十二分五十四秒ヨリ西ハ東經百十九度十八分三秒ニ至リ臺灣海峽ノ中央ニ星羅碁布セリ

二、周圍及面積

土地	屬島數	周圍 本島	周圍 屬島	周圍 合計	面積 本島	面積 屬島	面積 合計
澎湖列島	六三	里町間 二九、〇五、四〇	里町間 五四、〇一、四〇	里町間 八三、〇七、二〇	方里 四、一六五〇	方里 四、〇六〇四	方里 八、二二五四

三、土地ノ狀況　澎湖島ノ地タルヤ四時降雨少ナク植物ノ發育ニ最モ必要ナル滋潤ヲ缺キ剩サヘ冬季ハ强烈ナル北風連日絕ユルコトナク草根自然ノ成長ヲ沮害シ加フルニ土民ハ燃料トシテ草根及牛柴（即チ牛糞ヲ乾燥シタルモノ）ヲ用ユ然ルニ草根ヲ堀去スルガ爲メ滿地亦裸々其表層ヲ露出シ激甚ナル風水蝕ノ作用ヲ受ケ年々歲々其土壤ヲ削去セラルヽヲ以テ今日ニ於テモ既ニ膏土ヲ留メズ火山岩ヨリナル地殼ヲ露ハシ最良ノ畑地ト雖𪜈僅カニ砂礫ヲ混ズル瘠土ノ薄層ヲ留ムルノミ或ハ全ク土壤ヲ留メザル所尠ナカラズ故ニ農民ハ窪地ニ滯溜セル土壤或海濱ノ細砂ヲ運ビ來リ畑ニ入レ播種シ得ルニ過ギザルモノアリ故ニ此ノ狀態ヲ以テ移推セバ百年若クバ數百年ノ後ニ至ラバ耕作シ得ベキ地面無キニ至ルハ昭々乎タリ此時對岸ヨリ土壤ヲ輸入シ來リ耕作ヲ續行スルモ經濟上有利ナレバ農業繼續セラルベシト雖モ若シ然ラズンバ自然ニ癈滅ニ歸シ農民ハ他ニ轉業或ハ島外ニ移住スルノ外ナカラン現在澎湖島ノ面積八方里耕作地五千七百町歩ヲ有シ一年ノ地租ハ僅カニ六百三十餘圓徵集シ得ルノミ併カモ農民ハ猶其負擔ノ重キヲ嘆ゼリ以テ土地ノ肥瘠ヲ知ル可シト云フ愚昧ナル土民等ハ年々其所有地ノ削去セラレツヽアルヲ見ルモ敢テ怪マズ又憂トセザレ共今日ニ於テハ彼等ノ爲メ救濟ノ策ヲ講ズルヲ以テ肝要ナリトス

四、氣候　澎湖島ハ回歸線下ニ近ク横ハリ亞熱帶ノ地ナレ𪜈冬季ハ東北ノ季節風烈强ヲ極メ北部支那ノ冷氣ヲ送リ來リ又此ノ季節ノ來ルニ當リテヤ概子曇天ヲ伴ヒ太陽ノ照射ヲ受クルコト稀レナリ故ニ人ヲシテ綿衣ヲ襲子シメ或ハ火爐ノ傍ニ坐セント欲スルニ至ラシム夏季ハ南風徐々ニ至リ